

比較技術文化論——番外篇

——暗号戦争よりみた太平洋戦争（真珠湾奇襲を中心に）——

安 西 二 郎

Comparative Techno-Cultural Study

—— A Cryptographical Phase of the Pacific War ——

Jiro ANZAI

第二次大戦の終結以来、いったいこの問題をめぐって、何兆の文学、幾千巻の書物がかかれたらうか？ にもかかわらず、事の真相は十重二十重のヴェールにつつまこまれ、霧の底に沈んでいる、と言ってもよい状況にあるのだ。そのヴェールの背後にひたかくされている眞実とは、そも何なのか？

それは、他でもない。日本海軍が、皇紀 2597 年＝昭和 12（1937）年をもって、大日本帝国海軍の制式兵器化し、終戦の日までじつに 8 年間にわたって軍事機密電報（日本海軍が常用した＝戦略常務用暗号）をキャリーして来たかの 97 式邦文印字機（械）暗号機、付属暗号書甲の、いわゆる「紫暗号書」の秘密が、英米蘭の暗号解読当事者によって、真珠湾奇襲のはるか以前から、完全に破られており、結果として、山本長官の真珠湾奇襲の中心構想は、そのはるか以前から察知されていて、連合軍側は、文字通り赤兎の手をねじるように勝利の果実をもぎとることが可能だったのでは、との逆遠近法の問題提起をしたものが、ほとんどみられない不思議さ。

が、これについては、そのものズバリの疑問をずいぶん早く想っていた文がある。他ならぬ元帝国海軍大尉阿川弘之の名著『山本五十六』が昭和 44（1969）年に、新潮社より出版した初版本で、同氏は、これについて、彼がもつとも不思議に思うのは、同じ機械、同じ仕組で、キーだけが外務省用はアルファベットを用いるため欧文印字機と呼ばれた日本外務省の暗号機を開戦はるか前から解いていた米側が、キーだけがカナ文字の海軍のそれが解けなかった、と言いつけるのは、いくらなんでも面はゆくないか、と迫っていた点である。

不思議なことに、それから38刷を重ねて来た末え、今や新版と名のついている63（1988）年7月15日発刊の39刷には、このような明解な記述が消えている。

「そしてこれに関連する大きな謎の一つは、外務省の「97式印字機」による暗号電報が読めたアメリカが、海軍の暗号は解読出来なかったのか、日本の真珠湾攻撃を、アメリカは、事前に、ほんとうに知らなかったのかということであろう¹⁾。」

と、初版本の記述とは全くトーンおとしの物に変貌し、追求の鋭峰がにぶっている。だが、この新版においても、〈オアフの北半分の哨戒線は「ここからおいでなさい」²⁾と言わんばかりにあけてあった〉と言う一節は残されている。旧版では、これが発生したのはヒトラーのバルバロッサ作戦（Unternehmen Barbarossa=対ソ進攻作戦）³⁾が発動された1941年の6月22日前後からであった、という貴重な背景説明が入っていたが、この種の文言が何故之か、新版では、大幅に削られている。

ついでに言えば、つい先日、怪死したあのJohn Costello（1943～1995）の名著 *The Pacific War*（1981）⁴⁾は、日本はもとより枢軸側諸国の行動心理にも目くばりした良書で、真珠湾についても、わざわざ別章をもうけて、熱意あふれる真相探求の努力を続けていたにもかかわらず、未だに翻訳出版に致っていないのは何故之だろうか？

この書の中には、じつは以下のような驚くべき記述がある。その要旨を、本論筆者流に要約すれば、

チャーチルが微に入り細をうがって米側の決定から距離をおいていることこそまさに〇〇的。1941年8月の「太平洋憲章」会議以来、米英の対日抑止戦略がどれ程密接につながっていたかを考えると……。更にThe Public Record Office（英の公文書館のことで、有名なマグナ・カルタの原文もここに展示公開されている）にあるThe Prime Minister's papers（首相所有の文書類）を精査すると、疑惑はいやまず。首相の第3ファイル（超極秘の戦時情報要約を含む）、中でも第252群は1941年の日本側の状況をとりあげているが、目下公開されている。が、一つだけナゾめいた欠落がある。その中でも、セクション5は11月中の出来事を扱ったものだが「75年間非公開」が、公式の最終決定として特記されている。その非公開のロンドン在の文書群こそ、The Prime Minister から the President（チャーチルからルーズヴェルト）へ真珠湾攻撃の二週間前にわたされた戦争警告の細部を秘めているのでは？ とまで断じているのだ。

誤解のないように、学術誌の特怪である自由引用怪を行使させていただくと。

What is intriguing is Churchill's elaborate attempt to distance himself from the American decision. Curiosity leads to suspicion when one considers how inti-

mately connected were the two nation's deterrent strategies against Japan, especially since the Atlantic-Charter meeting in August 1941. Moreover, that suspicion grows stronger on examination of the Prime Minister's papers in the Public Record Office. In the PREM 3 File, which contain most secret wartime intelligence briefs, the 252 group dealing with the Japanese situation in 1941 is open, with one very intriguing omission. Section 5, dealing with events through November, is marked with official finality as "closed for 75 years." Does the still-sealed group of papers in London conceal the details of the war warning passed on by the Prime Minister to the President two weeks before Pearl Harbor⁵⁾?

とまで言っているのだ。

Costello の論及は更に延々と続くが、彼の本文 659 頁にわたる太平洋戦争論の最終ページの中で、George W. Linn 大佐が真珠湾攻撃の数時間後に OP-20 G (海軍作戦本部所属の 20 G = 参謀部 情報系) のスタッフのところによって来て、日本に対して紫暗号メッセージを打電可能か質したとある!?

Early in the afternoon GZ came into the watch office and motioned me to one side. I was floored when he asked if we could encrypt a message in the Purple System for transmission ... To learn of Lieutenant Commander's curious request, which "came from higher up," is as startling today as it must have been for Linn. What was the purpose of sending a message to the Japanese after war had broken out — could it have been an attempt to cover up the intelligence record? We may never know, since the man who made the request is now dead. But had the ploy been tried and the enemy discovered the extent to which the Americans had penetrated their most secret channels of communication, a timely revision of their codes might have deprived the US Navy of the intelligence that made their victory at Midway possible — and the whole course of the Pacific War might have been altered.⁶⁾

とまで言ってくれているのだが、Costello がここに引用している文言からも、ワープされているものの、日本海軍のトップシークリットの通信系が、太平洋戦争前から解読されていたことの何よりの傍証ではないか。

現に Costello の本の数年後 1991 年に世に出たオーストラリア人の暗号解読 (それも対日本海

軍)の専従将校としてロンドンの海軍省が直々にハンドピックした人物たる Captain Eric Nave と元ミサイル技術者 Rusbridger の共著 *The Betrayal at Pearl Harbor* (Summit Books, 1991)⁷⁾ の中には、今日まで連合軍側の言ってきた通説、日本海軍の最高暗号は、珊瑚海々戦の前後からようやくその一部が読めるようになった程度、と言いつづけるのは、俗に言うガセネタで、じっさいには、太平洋戦争の数年前から解けていたどころか、連合軍側は、共同で情報交換と傍受解読作業を各地でつづけて来たのであり、戦後公表公刊された各種の電報や解読資料のデータさえ改ザンされているのだ、と無数の傍証や状況証拠を挿入してルルとしてのべたものである。

もしも、Nave と Rusbridger のこの Exposé が事実そのものに無限に近いとすると、第二次大戦の終結後はおろか、数十年にわたってもほとんど半永久的に、敗者である日本の、連合軍側が半世紀以上も前にすっかり解いてしまい、それによって大勝利を得つづけたルーツが、何故え隠くされ続けて行くかの真因が、説明出来ないのである。

ことわっておくが、筆者は日本の真珠湾攻撃が、正々堂々の攻撃であった、と言っているのではない。何よりも、かよりも、筆者の真珠湾撃への真相探求の作業は、あの焼け跡時代に、米人の宣教師から、若し日本のクリスチャンがしっかりしていたら、真珠湾はなかった、とののはなはだ理解にくるしむ発言をしたことも、一種の開発刺激化していたのだ!

が、それと同時に、Old China Hand の仇名のある中国から引あげて来た米宣教師ドナルド・ハンター師から、日本政府の外務省がワシントン時間の午後1時、ハル国務長官に手交を厳命されていた日本政府の最後通告を、手渡すことに失敗し、1時間も遅れて手交した野村・来栖の両大使が何故之今も逮捕されていないのか、とイキマイていたのを今に忘れないからである。

平素はまことに温顔に笑みをたたえた人物で、おっとりしているハンター師が、猛烈に怒っていたので、強く印象づけられたが、その際「戦犯とは、野村/来栖のような人」とマッカーサーの占領軍の法務大佐カーペンターが、公言していたのに、こともあろうに、この二人が未だに逮捕されていないのは、何故之か、とほとんどジタンダ踏まんばかりであった!

この二人の大使の中でも、後から待命全権大使としてチャイナ・クリッパー飛行艇でかけつけた来栖三郎は、特使といい条、ベルリンで日独伊同盟条約の調印にあたった当の人物ではなかったのか? これは米側に対するほとんど威嚇であり侮辱であるとみていたのである。

したがって Pearl Harbor のいわゆる Sneak Attack⁸⁾ が発生したとたん、来栖は Kurusu, the Crook (悪漢来栖) と化し、徹底的に悪玉化されていたのだ。

更に言いつづければ、いくら野村が、親米派を自稱しようと、彼は海軍大将であり、元軍令部次長の要職にあり、第三艦隊司令長官として対中国作戦にも参加していた人物ではないか。

そのような男が、あれほどの日米交渉のはてに、次に来るものが、日本側の真珠湾奇襲であ

ると見抜けなかったというような不自然があるだろうか？

このような過去（心理的前歴体験）を秘めていた二人の特任大使の *Zweisamkeit*（二人の孤独）とも言える微妙な立場は、なまやさしいものではなかったろう。天皇の政府の代表でありながら、外務省の嚴重警告である「ワシントン時間の午後1時米國務長官への手交」をはたせなかった二人の特使が、それこそ自責の一片の念も感じぬようなフルマイにおよんでいるのは何故之だろうか？

だが、ここにも更に不思議なナゾがある。ハンター牧師も絶叫していたように、「何故之、連合国は「眞珠湾のダマシ討」を演出した二人の外交官に、あろうことか「マルノウチ・ホテル」のスイートをあたえ、米国のVIP扱いしているのか？ 占領軍の法務大佐カーペンターによって、失述のように、戦犯とは、まずクルス/ノムラのような人、と言われていた当の二人が、占領軍によってこっそりかくまわれているのは何故なんだ？ との *aside* を、烈しい言葉で独言しておられたのが、本論筆者の心中に今もわだかまっている。

実を言うと、本論筆者は、この問題の深刻性を事件というよりも事象発生当時は認識せず、それが身近に迫って来たのは、米国留学中に、Theobald 少将の *The Final Secret of Pearl Harbor* (1956)¹⁰⁾ を入手したり、米政府が公刊をゆるした、The PHA (Pearl Harbor Attack) に関する 39 巻にわたる米議会の合同調査を入手、これらを日夜数十年にわたり、熟読することによって、ようやく事の重大性に気付き初めていったのである。

このボウ大な記録は、日本の政府や各省廳の通り一偏な公式報告とはことなり、米の議会デモクラシーの眞ズイを傍証するものとなっている。

例えば、ルーズヴェルトの強力な支持をとりつけていた当時の米海軍作戦部長 Admiral Stark の眞珠湾以前の期間の言動は、伊海軍の軍港タラントに在泊していた伊地中海艦隊の運命とそこから引出し可能であった教訓を考えても、実に微妙なものとなる。

思えば、スターク提督は、1940年11月11日夜から12日朝にかけて英海軍の母艦機が行ったいわゆるタラント泊地にいる伊主力艦隊への奇襲攻撃の重要性を瞬転裡に把握し、この攻撃の直後¹¹⁾に、後からみても適切をきわめる進言を、当時の太平洋艦隊司令長官 Admiral Richardson に打電していたのである。

その要旨は、今度のイギリス海軍の奇襲成果にかんがみ、少生のオアフ島湾内在貴艦隊のに対する水中・海上・空中よりの奇襲の可能性について即再検討の上即刻報告せよ、と言うものであった。

これだけみてもルーズヴェルト直下の海軍作戦部長が、これほどの即応体制を見せていたかがわかるのだ！ 海軍の超ファンで、もと海軍次官補歴を自からの来歴中にもっている Roosevelt が、見逃がすはずもなく、Roosevelt がこの直後に全身震撼的にうけとめた Coventry のレッスン¹²⁾（英のコヴェントリー空襲体験）とともにしかと彼の心中にアンカーさせ

たと思われるのだ。

以上の事の経過だけでも、米がムザムザと一年あまりを、火薬のタルの上に座しながらほうけていたのではない事は傍証されようが、事実はまさに小説より奇なりどころか。凡百のノンフィクションよりも更に複雑奇怪な展開をみせて行くのである。

と言うのも、このタラントにおける同盟国イタリア海軍の汚名をぬぐってやろうと言うのか、当時ヨーロッパのほぼ全土とイギリス南東部までその翼下にしていた独逸空軍は、英の中部工業都市 Coventry に対して、後に coventrite すると言う単語を OED に入りこませたほどの、猛爆撃をくわえたのである。

しかも、独の Luftwaffe による Coventry への爆撃は、単なる偶発事ではなかった節がある。それは他でもない、Coventry こそは、タラントの伊艦隊に致命的損害をあたえた航空魚雷¹³⁾の貯蔵基地のある町でもあったのだ。

この点は、高名な第二次大戦史はおろか、チャーチルの第二次大戦回顧録にもリマークされていないが、本論筆者は、の『雷撃』の中に、この事実が裏書されている個所を、発見し、長い間さがしていた、コヴェントリーへの空襲の必須事情の一環をなす "Missing Piece" たる Missing Link を発見せりとのユウレカ感を最大限に満足させたのであるが。

この線が正しいとすると、英対独の対決はまさに、ちょうちょうハッシのつめ将棋だった。矢にものべた、タラントの英による勝利が、世界のあらゆる軍人や要人らに、最大限の教訓をあたえたことは、十分に考えうるが、二重スパイ（独にも英米にも役立つ）ポポフ（暗号名トライシクル）が、ベルリンの Abwehr の長官 Admiral Kanaris から、Singapore や Hawaii の軍事基地の詳細な諜査を命ぜられていることを、連合国側にたれこんだ（Tip-off）したことは今やこの方面に関心をもつ人の誰しらぬ者のない逸話化している。

ポポフはこの件を、米の FBI 長官 Hoover にたれこんでみたが、まじめにうけとってもらえなかった、とのべているが¹⁴⁾、これは、むしろ Hoover や Roosevelt の組織的に行っていた Red Herring であったと考えた方が辻妻があうようだ。

Red Herring とは、言うまでもないが、問題の所在個所からウノメタカノメを故意にとおざける意企的なポーカーフェイス行意にすぎない。

かくして、真珠湾をめぐるの虚々実々の諜報合戦に局面参加させられたほとんどすべての荷担者たちは、自分こそが早くから日本の企図を正しくつかみ、予知してやっていたのにと、切歯やくわんを演出しつつ今日にいたっているのだが、その狂態を横目につつ、太平洋艦隊の前任長官の E. O. Richardson 提督は、ル大統領によってその予言をしりぞけられたこともあり、だから言っただろう！ との満足感にひたっているのである。

事実、Richardson 提督は、東京裁判証人として出庭を求められた件を快諾したばかりか、在東京中、人を介して A 級戦犯容疑者の永野修身提督に「真珠湾攻撃の腕前お身事」¹⁵⁾との礼

辞をおくり、真珠湾の責任我にありと、公言した敵将永野をはげますほどであった！

それにしても、山本五十六がその脳中にはぐくみ、育成し実行に移した PHA = Pearl Harbor Attack の中でも、Coventry が最大の教訓をあたえたことは、間違いないだろうことは、真珠湾攻撃の米側による裏かき作戦が完全に失敗するまで、Roosevelt と Stark の間に保たれていた honey-mooner-like *Zweisamkeit* あるいは *Zweisamkeitische Sympathie* によってもある程度了解可能であろう。

それにしても、日本海軍が Coventry のレッスンもふまえたすえ、ハワイの太平洋艦隊に必殺の攻撃を加えるであろうとの Sorge 諜報は非肉なことにソ連の超スパイ（対独・日・英米の三重スパイで、内実ではソ連のスターリンや赤軍の諜報第 4 部に忠誠を誓ったをり、そのためにこそ命をおとした）によって、更にその Hexen-kessel（魔女の大釜）の中果をかきまわされたのである。

この件については、更に後述するが、このヘクセンケッセルをかきまわし、終始もつかぬ泡立ちというよりも煮えたぎりを生ぜしめた人物の二人は、チャーチルとスターリンに他ならない。

本論筆者はこの件についても、早くも昭和 52（1977）年 2 月 10 日発刊のプレジデント版「ザ・マン・シリーズ『山本五十六』」に、共著者の一人として参加し、その際「“真珠湾”はソ連の演出だった」と題する一文を発表、このゾルゲ諜報によっていち早く日本の意企を正しく予知しえたスターリンは、日独による東西よりするはさみうちの危機をかわすため、眞に地球的な規範（global scale）の軍事外交作戦を展開し、真珠湾に向う南雲機動部隊の動きをアメリカに事前通告する約束を破紙にし、ルーズヴェルトに（自からの企画した真珠湾沖における嚇々たる迎撃戦の発動機会をこぼみ）決定的な挫折に追いこんだ、と仮説発表しているのだ。

この説は、“And I Was There,” と題する一書によって、元太平洋艦隊の情報参謀として、真珠湾の汚名招来の直接責任者でありながら、将官昇進をはたしている Rear Admiral Layton の言う、ソ連の監視船「ウリッキー」¹⁷⁾ の存在指適によってある程度バック・アップされたといえようが、発表当時も、「一傍証を駆使して真珠湾奇襲の謎に挑む、大胆・迫真の仮説」/と編集子が特記してくれたもので、今となつては、28 年もの才月を経過しているものの、ちやきちやきの情報参謀が 19 年になってやっと推し得たものを、軍歴を全くもたぬ若年の歴史心理学者が一つの推測仮説としてあえて揚言したのとして非常になつかしく、また、ひそかに誇りにしているものだが、その際若気のいたりで、マエルスク・ラインの Lurline を、ソ連船「ラーリン」とよみちがえてしまった、という思わぬチェックミスもあり、その点では後発記事とは言え、「ウリッキー」説を出して来た Rear Admiral Layton の “I Was There” (1986) にはいくら感謝してもよいと思つているのである。

このゾルゲの global scale の諜報活動については、ドイツの元外交官でいくつものノンフィクションを世に問うているポウル・カレルの *Unternehmen Barbarossa*¹⁸⁾ にくわしいが、こ

の件の中心人物たるゾルゲについては他日論じよう。

それにしても、Old China Hand の仇名をつけられていることを誇りにしていたねっからの中国人好きの Hunter 氏が、たった一足のナイロン靴下のため（だけではないが）に米軍人と不倫を重ねる日本女性を横目でみながらもらした言葉がまたスゴかった。

君方は、NYLON とはどう言う意味か、本当に知っているのかね？ NYLON は、Now You Look Out, Nippon! の略、冠頭略語（Acronym）で、サア日本人よよくみよ、世の中はかわるんだ、世界の女性はも早や日本の絹靴下を必要としていないんだぞ、と言う発明者 Carothers (1886-1937) の血を吐くような言葉だったのだよ、と言うのである。

ナイロンは、中国民衆に対してとたんのくるしみを反復強迫的にあたえている日本海軍機による戦略爆撃に対する良心の人 Carothers の答えであった！ と言うのである。

だが、Carothers の死亡の年が、97 式印字機を日本が制式兵器化した年と同年であることに注目されたい。

後知恵的に言えば、日本海軍が、長距離無着陸の「渡洋戦略爆撃機」を概成させ、これに急ぎ爆弾吊下装置をつけて地上爆撃用に転換をはかっていた時、既に同じ海軍は、自からの亡びの径を啓開しつつあったのである。それは他でもない、防弾タンクは絶体必要なりとの、現地部隊の将兵による血をはくような叫びは、どこかにおしやられ、ワシントン会議やロンドン条約による 5・5・3 の協定比率の壁を破る break-through として、考えられた日本海軍による航空兵力は、日本文化の中に長く尾を引く「不措身命」の一期一会（one final decisive encountering）のために、集中されることになりがちで、防弾用の余分な重量があるならば、すこしでもガソリンを多く、爆弾を多量につめばよい、との思想の呪縛をふり切ることは出来なかったのである。

資源少国の日本ならばこそ、四発で防弾も完備した軍用機をとの思想は、飛行艇や重戦（紫電/紫電改）で有名な川西の菊原静男氏の頭脳というよりも、人情心からしか芽生えず、他では（他の日本メーカーでは）実用化しなかったかのようである。

それにしても、NYLON のこのような文化史的な了解は、肝心の OED やウェブスターなどのどこにもみられず、日本ではわずかに岩波の独和辞典にだけ入っているのだけなのは何故か？

だが、ハンター師の発言が心のすみにひっかかっていた本論筆者は、滞米中、日曜日に教会の礼拝に出席した後、ほとんど必ず大学図書館にたてこもり、第二次大戦以前の欧英米人による日本関係資料を探読し、このナイロン伝説についても、ハンター師の accusing finger のさしめすに近い資料をかくにんしている。それは他でもない、頂度、日中戦争の前後に新企画として Time 社が始めた大型写真雑誌の Life に、日本の無差別爆撃への抗義の一環として、誇り高き米婦人たちが、彼女らの素足を美しく包んでいた日本製の「絹靴下」を次々と脱ぎ捨て、火に投げ、当時の欧米の婦人として最大の恥とされた「素足の恥」を甘受するシーンが掲

載されていたからである。このような抗義の嵐にもかかわらず、ルーズヴェルトとその政府の対日戦略物資供給は全面ストップされず、スペリー社の誇るオートパイロット（自動操縦装置）とフェアチャイルド社のレディオ・ディレクション・ファインダー（方向探知器）の輸出はやまないどころか、いわゆるクズ鉄はもちろん、対日禁油もこの時点では止まず、ために失望した Carothers はその成功にもかかわらず自裁した、と言うのである。

このハンター説は、ずいぶんと説得力があるように見えるが、仮説としてはともかく、Working Hypothesis（作業仮説）としては、すこしピントはずれのところもある。

と云うのも、日中全面戦争の端緒をひらいた Marco Polo（いわゆるろうこう橋事件）は、1937年の7月7日の発生で、Carothers の死はそれよりも数ヶ月早い。とすると、南京や重慶へのいわゆる大量の爆弾と焼夷弾による Carpet Bombing¹⁹⁾の以前であり、Carothers の中国人への同情説は、すこしあやしくなってくる。

このような事情をかんあして行くと、ハンター氏の中国人への情念はわからぬではないが、Carothers 自身の反日感情の直接の吐露とは言いがたく、中立国人として、デモクラシーの本家本元を自認していた米国大衆のフラストレーションのはけ口として、あるいは、在中国外国人の中国人への同情とあわれみが、引き金となって発生した「日本製品」ボイコット運動が、日本のドルかせぎの主要品目の一つであって絹靴下に、標的をもとめ、その下ささえのために、Carothers 神話が生じたと判ぜられる（この件について、どこでどのようなマスコミ情報操作が行われたかは）、今後にまつべき問題であろう。

この NYLON stockings 神話の nach-schöpferisch（二次的創造性）な一面に、ル政府というよりも Roosevelt がどのようにかかわっていたかは今後の宿題として残るが、Coventry の教訓となると、ル大統領の全身震撼的にかかわりがあることは、William Stevenson の *A Man Called Intrepid* (1976)²⁰⁾によっても明白である。

この書によると、ドイツの最高暗号機エニグマの解読により、独の最高司令部の一挙一動をほぼ完全に事前予知していた Winston Churchill とその揮下諜報部は、歴史と伝統を誇る 25 万人都市の一夜にしての消失を甘受 (ate worm-wood) したのであると。しかも、その唯一の理由は、ドイツの ultra secret の最高暗号が英当局によって完全に解読されている事実（独暗号の被解読）を、独よりひたかくすためであったと!!

世には、チャーチルとは肥満体の気の好いサンタクロース的の老人。しかも、第一次第二次大戦ともに、warmonger（好戦屋）の汚名を甘受し、祖国と王室と国民を救った求国英雄!でありながら、政治的敗北を甘受、一切の弁解をやらす、日曜画家の先駆者で、ノーベル文学賞にも輝く仁、当然ながらイギリス人きっての大公爵ぐらいに思っている人が多いが。

事実は小説より奇。ウインストンチャーチルは Lord チャーチルの長子であるが、かれの有する爵位は永久爵位ではない。マンチェスターの粉屋の息子の Rolls-Royce の Royce が、得

た Sir (騎士身分) や、ロンドンの貧民街イースト・エンドから身をおこした Chaplin の得た Sir と全く同じ騎士身分で、一代限りのものにすぎなかったのである。チャーチルとは、別言すれば、永久爵位をもつ父 Lord Churchill の長男として生れながら、ついに父のような Lord 身分にはならず (なれず?)、娘のサラをロサンゼルス地区で、絶えず縄目の恥ならぬ手じょうの恥におとしめる前歴をのこした怪人物だったのである!

この複雑奇怪な実態の深層—真相迷宮への秘密の Trap Door のカギこそ、1991 年にいたり、とつとして Now York の Summit 出版から世に出た Captain Eric Nave と Ex-missile Engineer Rusbridger の共著になる *Betrayal at Pearl Harbor* であろう。この書の中のチャーチルこそ、米の Roosevelt と数々の密約をかかわしたあげく、土端場になって真珠湾の裏切を行ない、Roosevelt に “ate worm wood” の思いをさせた仁であり、日本の誇る 97 式印字機の秘密は、開戦以前にそっくり連合軍、特にイギリスの誇る共同傍受と解読組織によって、そっくり知られてをり、チャーチルこそが、第二次大戦の演出者であり、その共同謀議の主であるとの accusing finger を、無数の傍証をふまえて告発した世紀の奇書の版本だ!

だが、真珠湾攻撃の真相を研究的に追求して行く我々の前にたちはだかつてくる最大の壁こそ、わが大日本帝国の過去の一等資料が、ほとんど灰にされており、その過去の証人となりうる人の多くが、まさに貝のように口をとごし、鬼籍に入ってしまったたり、たとえ生きても、沈黙の方を積極的に選んでしまわれることである。

が、ここに一つ戦中派少年の生き残りとして、どうしても我慢ならぬ点がある。それは他にもない。欧米の公文書館を訪れてみると、同邦には完全に口をとごしている同じ元軍人や外交官が、まるで他国の奴隷の如く、他国の勝利者にたいしては、必要以上に (他人のめいわくも承知で) ずいぶんと事の深層や真相をしゃべりちらしている事実が残っている。

例えば、作家の故松本晴張氏には『球形の荒野』という小説がある。その筋は、かの第二次大戦中に、平和をもたらすために連合国に機密をもらした外交官が、娘に一目あいたさに外人パイヤーをよそおって戦後に来日、密会するが、結局は、娘に身分をうちあげることが出来ず、さって行くという話である。

筆者は、この話を数年の留学体験をへて帰国した直後、松本氏の小説とその映画化を介して知ったが、この話が開発刺激となって思い起したある一事がある。

それは他にもない、ガダルカナル戦の最中のライフ・マガジンの某日某号に、アメリカの多分 B-17 と思われる爆撃機に身をたくした日本人の POW (Prisoner-of-War) が、下方の日本軍の砲座の所在を指示しているシーンであった。本論筆者は、ライフのなかで、この一駒写真に出くわした時、血が逆流するのを覚えたが、その写真の陸軍々人は中佐官で、(襟章から) 防暑服ではなく、眼鏡をかけており、頭は丸刈に近かった。その鮮明度から見て、知人ならみわけはすぐつくはずだが、当時コリアから留学していた元陸軍中尉の留学生 (情報系) によると、

ガダルカナルの前線に実情査察のためにやって来たOという参謀であろうと言うことであったが、第二次大戦にはこの件も含めて未だ真相がさだかでないことが多すぎるのではないかとと思われる。

それにしても、もっと大きな問題である、真珠湾の奇襲攻撃を日本軍と日本政府がしかけたことは、如何に強弁しようとも逃れ得ぬ事実であるが、肝心のワシントン時間の午後一時に「いつにても提出できるように、現地やといの米タイピスト等を用いず、準備しておけ」と訓令してあった最後通牒相当文が、何故之に土曜の深夜までにととのえられていなかったのか？他方、米国側では、同じ夜中に、14部の中13部までを読み終え、ル大頭領は、シュルツ中尉の前で、This means war! と断言している事実がある。

これに対して日本側の某作家は、この表現は必ずしも戦争を意味しない、とコメントしているが、側近のハリー・ホプキンスが、敵が近よって来るのを知りながら、どうしようもないのは残念だと切齒するのをおさえて、ル大統領が、我々はデモクラシーだ、と言ったのは今や有名な逸話である。

これを要するに真珠湾事件というのは、世界史的スケールの「反転図型」のようなものと考えた方が、納得が行くのである。

世には、ソ連のスターリンが、ヒトラーの電撃作戦にあえなくも總くづれになり、モスクウ至近まで攻めいられたのは、スターリンが、ゾルゲらを頂点とする世界各国の供する事前警告を真剣にうけとめず、迎撃計画を発動しなかったからと了解し、かえって事の真相追求の機会を逃しているが、本論筆者はそうは思わない。

スターリンの場合も、ほぼ6ヶ月余りに発生したChurchillによるCoventry Lessonの全身震撼的戦争指導の内幕のすごさによいしれ、ルーズヴェルトと同様に、かんじんの第一線をうけたまわる面々に、ドイツ軍の暗号被解読と、高級スパイ情報によっても確認されてきていた*Unternehmen Barbarossa*が6月22日を境に、全面発動されることを、ほんの一部にしか伝えなかったことにより発生したと思われる。

思えば、ルーズヴェルトとその政府と陸海軍が、あれほどの總くづれとなったのは、その第一線司令部が、ウルトラ情報リストから、故意に、しめ出されたからであると結論せざるを得ない。

チャーチルがその死の1965年以後も三世代(25×3)、子子孫孫の代まで、知らしめようとしなかった1941年11月分の英暗号解読部の提供してきたWar-time Intelligence Briefsの非公開部分は、帝国海軍の連合艦隊旗艦や東京の軍令部の発電しつづけた97式邦文印字機・付属暗号書甲(その表紙こそ紫)による4ケタの電子素子をあやつる暗号機の盗読が常時行われていたことをひた隠すための不世出の怪人Sir Winston Churchillの意志に発してをり、これこそスターリンやルーズヴェルトの不可解な行動のすべてを總括するマジック・キイでなくて

なんであろう。

思えば、スターリンが原爆の米による所有を熟知しつつも、ヤルタにおいて、英米首脳から、大西洋憲章の約束や公言（民族自決・植民地代反対）を破紙にする取引に成功する一方、ルーズヴェルトや、チャーチルが、こわれてもスターリンの恐怪に屈せざるを得なかったのは、チャーチルの金欠病（米の援助に頭があがらない）とか、ルーズヴェルトの老人化とか言ったような単純な事実では、とうてい説明しえることが出来ない何かがあったからであろう。

米側だけに限っても、勝利国アメリカが隠さざるを得ない重大な弱みが、勝者の米側にあったのである。

何故之、野村や来栖が、更に一等書記官の寺崎英成が、免罪され、これらの人々の、天皇に対する責任さえ免ぜられるどころか、親英米派の Don であった吉田首相でさえ指一本ふれられぬ奇怪な免責が、まかり通ったのか？ それは他でもない、眞珠湾攻撃の責任を日本にのみおわせるには、その前後少くとも数年間にわたって行われて来た（Captain Nave と Rusbridger の言う）開戦数年前から、とっくにとけていた日本海軍の暗号事情に疑惑へと追求の焦点がしばられてくると、連合国こそ苦境にたつことが明白になって来ていたからであろう。

この事実を、何よりも傍証するのが、当時の在ワシントンの電信課員の土曜と日曜の勤務表や担当時間離でさえ、東京裁判で詳しくしらべられたことがない事実である。

いや、それよりも何よりも、東郷外務大臣の訓令をさぼった在米大使館の上は野村大使から、下は電信課員にいたるまで、一人のスガモ収容者も、米側が出さしていない不思議さである。

飛ぶ鳥さえおとすほどの米政府とその代表マッカーサーには一見日本に何の恐れるものもないはずである？ しかるに、米占領軍といえども、ハレモノにさわるようにこの二人のもと大使、それも対米最後通告相当文を、1時間（20分は、ハル長官が待たせた）遅延のはて、手渡されたこと、それがどんな事情でそうなったかは、勝者のアメリカは、暗号の盗読はもとより、盗聴や監視を含むあらゆる手段で行えたし、又、行っていたはずである。

更に言えば、天皇をソ連の追求から守るためには、むしろ東京裁判で、在米大使館員の職務怠慢をつけば容易に行えることである。

それがそうならない、あるいは、なれなかったのは、在米大使館員による時間操作を細かく洗いなおして行くと、勝利者側の「魔女の大釜」(Hexen-kessel)とも言うべき、時間の罫計の実態がアブリ出されかねないからであったと思われるのである。

眞珠湾攻撃計画を数ヶ月も前にいち早くスターリンに通告、ゾルゲの言によれば超等級のおほめにあずかり、ルーズヴェルトからも陸海両関係者にも通知、大喜びであったと云う件が、単に見過されただけではない、そのはてにあったのは、ソ連の久しきにわたるゾルゲの功の無視と、日本側による断罪！

この一事だけでも、未だ未だ日本軍による眞珠湾奇襲には超々極秘があることが傍証されよ

うと言うものである。

その一端を物語るのが、1989年のゴルバチョフによる更なる雪解けに応じ、モスクワ当局が一端はすべてみせると云っていた、ゾルゲ諜報の内幕に再度ヴェールがかけられたことである。

既に日本占領直後から、反共の旗頭であったハズの米国政府が、反共十字軍といってもよいG-2のウイロビー少将のゾルゲ事件の真相 exposé にヴェールをかけ、ウイロビーを占領軍からマッカーサーもろとも追放した件もあるが。

この件には、単純な右よりのウイロビー少将のうかがえぬ、黒い背景がかけをさしていたのだ。

その一端は、ゾルゲの自白調書の一部が日本に返えされるにあたって、米当局が付した注記(みすず本の第一巻末にあり)に傍証されて余りある。

この調書の元本は、米国にあり、FBI, CIA, 非米活動取しまり委員会の傘下にあり公開されぬ。この元本の中、日本国のインタレストにさしさわりの部分を除いて、返還された、となっているそうである。

この一節からも、今日「みすず書房」から刊行されている数巻の中から、日本人の目にふれては米側にとっては都合のわるい部分が、相当多数さく除されていることが傍証されるのだ。

端的に言うと、本論筆者は、この米側が日本に返還をこぼしている部分こそ、他ならぬ日本海軍をめぐる情報活動であり、その中の最重要物件こそ、他でもない真珠湾奇襲計画を始めとする詳報だと推するのである。

だが筆者は、失述のゾルゲの告白のみに基づいてこれをほめかしているのではない。

ゾルゲの公開資料の中の、「それでは日本の情報の中で、何が一番取りにくかったかと質ねた当局に対し、海軍が一番容易で、陸軍が一番むつかしかった」と言っているのに、公開されている資料の圧倒的多数は、陸軍の兵器や部隊移動や編成情報に終始していることを、公開史料の内容分析からつきとめたからである。

これでは、単純な分析からも、最も初歩の消去法からも、秘されているのが、他ならぬ海軍情報であることが傍証されてしまうのである。よって、今日「みすず書房」に引きとられた資料を放出する前の sanitizing (人畜無人化) にあたって米当局者がよいかげんな人物か、第二次大戦の終了により、諜報緊張度にたるみが生じたかの、どちらかと思われるが、これはひよっとすると、いささかうがちすぎだが、ことの真相を、われわれにつかみとってほしいという「ドロシイ」のような心やさしき人物のしわざかも知れないのである。(つづく)

参 考 文 献

- 1) 阿川弘之『山本五十六』(新潮社, 1969) 初版

比較技術文化論——番外篇

- 2) 阿川弘之『山本五十六』(同上, 1988) 63 版
- 3) ドイツが 1941 年 6 月 22 日発動した対ソ侵攻作戦
- 4) John Costello, *The Pacific War* (Rawson Wade, 1981)
- 5) Ibid., p. 634.
- 6) Ibid., p. 659.
- 7) Rusbridger & Captain Eric Nave, *The Betrayal at Pearl Harbor* (Summit Books, 1991)
- 8) Sneak Attack (いわゆるだまし討 / 作家の故豊田穰は Snake Attack と書き続けているが, こう言う言い方は英米ではしていない。)
- 9) 海軍における陸軍の参謀部にあたる組織。
- 10) Rear Admiral Theobald, *The Final Secret of Pearl Harbor* (Davin Adair, 1956)
- 11) Hearings before Joint Committee on the Investigation of Pearl Harbor Attack, Part 13 (U. S. Government Printing Office, AMS Press, 1946), p. 1000.
- 12) E. Layton et al, "And I Was There," (William Morrow, 1985), pp. 220, 221, 251 & 253.
- 13) Charles Lamb, *War in Stringbag*, trans. by M. Ueda et al (Asahisonorama, 1977)
- 14) 安西二郎 “パールハーバー” が遺した最後の秘密, 戦記戦史誌 [丸] 1991 年 12 月号 Part II
- 15) 安岡二郎 _____ [丸] 1991 年 8 月号
- 16) 安西二郎 “真珠湾はソ連の演出だった”, 『ザ・マン・シリーズ・山本五十六』(プレジデント社, 1980)
- 17) E. Layton, *op. cit.*
- 18) パウル・カレル, 『バルバロッサ作戦』フジ出版, 1976, pp. 43-138, 255 & 256.
- 19) 一定の地域を徹底してカーペットでも敷くように爆撃する方法, 別名 Saturation Bombing とも言う。
- 20) William Stevenson, *A Man Called Intrepid* (Sphere, 1976), pp. 183-189.

1995 年 9 月 30 日 受理